

聖德太子傳

共十一



聖德太子傳卷一



聖德太子御入胎并御延生皇瑞之事

二歲

二月十五日唱南无佛給事

三歲

三月三日桃花宴之事

四歲

王子達御口論之惠

五歲

いひしつゝ六生の利益満足し我朝日域より
了んしてきれり用明天皇此を推古天皇
の御マデ一親王年其あひと世に
中々童男優婆塞小玉身乃三親と成して王
法佛法とてふう終をわうし海にに我朝の秋
る自むまのあさり乃佛をりてとんを佛の
るるらととるるく河信祇切とるるこことい
されと執謝せん海に海屋らととぬう一佛の
神趣とてそのともあんぞこれとてけくさん
まもるれとふりらりりきこの及倍うのるる
ううらう流のち残うまやとる乃思ひとてこ
あらんこととていりりこれ及場よあひるを

我朝靈廟交利物の事終とひきき毎日
の梵道とのふあう死後うくを上宮太子海
らんるふとてとるれあも人乃至回教法界平
等利益教
神聖徳太子我朝は遠人トやうの時代とて古
ふきりめれとて教達天皇元年 皇
事たりとて六十余列のうらにたれとて
あしあふとてとて宮とて
三輪の郷古宮村河内がとらと磯城合刺
突らんたり時のみと人王三十一代欽明天皇
第一の皇子敏達天皇は即位元年此のころ
東宮とて又欽明天皇御西の宮とて豊日とて

ていつくしつらうまふまあり終りし頃名を聞
 人重名と申してこれと欽明と申されはむとめ
 ことなるはあんとやうの後十六年に阿比あふ
 て重名は即位しきまひりて用明天皇と
 申すはあつらひらとてうそを思ひのうひやくと
 ぬれし天神七地神六代神代十二代とて
 て神武天皇とていふ人王世二代の
 といふ聖徳太子ははらけ用明天皇は
 三つあふやうなり知れむとあんな
 といふてうのまき九代乃ちやうと
 てこれとていふ人王世二代の
 明天王即世廿二歳次 甲子年五月一日 甲子

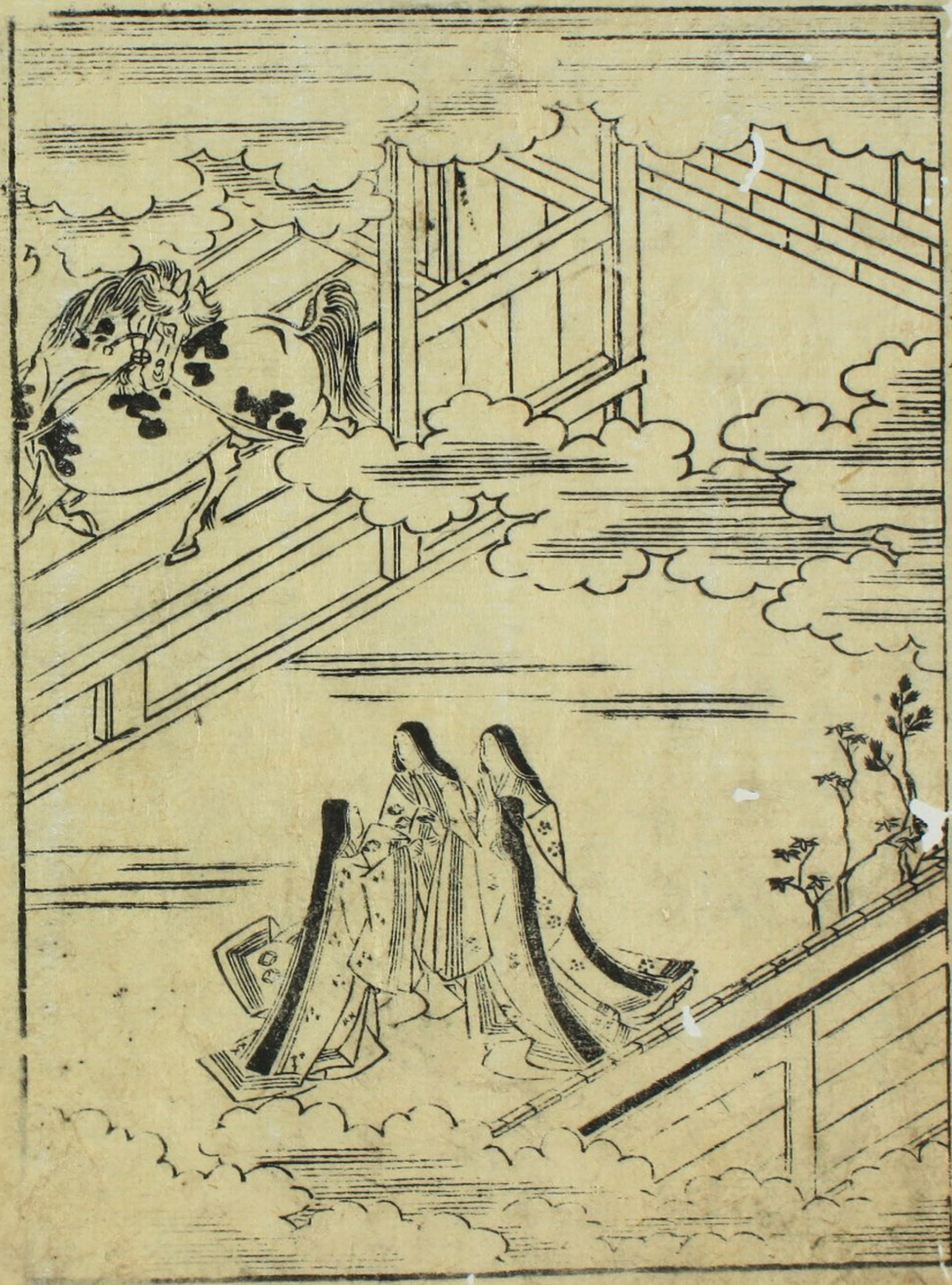
衣乃後中に金色の僧はくつらとて用明天
 王成法又やう一回のうちに
 せんあいのちとて勢揃ぬとやうに
 成の後のとていふとてあつらとて
 申されは同春とていふとてあつらとて
 といふとていふとてあつらとて
 いのちとていふとてあつらとて
 だつらとていふとてあつらとて
 やうとていふとてあつらとて
 みくはとていふとてあつらとて
 といふとていふとてあつらとて
 といふとていふとてあつらとて

りく思ふるをれんそいほくうらむさうり給ふや
せうしひそまうらつれし信ふさんていつく
家名ミヤノとし救世クセ大悲ダイイ菩薩ハツラクらりてはひれを
みる西方さいほうありやとく人終ひはるありひごころか
うらまのこ地お何事らまにこころもあつくか
ほしてせおねて又やあうまうそ一さいの女人にんじょか
その力ふじやうふゆりいらふあうしてさやこれ
まのいせげをへんあうまうまうしとちう
流をゆらうひてのありく流大悲ダイイ闍提セツの流
いふしきひくふじやうといどりけあまを
らく特カク人カクに感カクしき時トキあう死シまもよ
うとことせんやあう救世クセれた救クセあることこの

まうりその時よみうらうまういしてまをり
くもはあつよまうらうしやうれは信ふ流
あびらうまうらうみひく口のの中なかにう給ふとま
まうらうらうまうらうあうあうあうあう
らふ物ものとらうじく地ありそれらやれまう
物ものあうらうらうらうらうらうらうらうらう
まうまうまうのまういじくあうらうらうらう
一さいの女人にんじょの口ふ物とらうじくらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
思オモひて給たまひとほびはよまうらうらうらう
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

海へびまらしとぬやくハ膝よあしせ給ひくわえ
 ぬいあひまおひいんかたの法書紙割して毎
 三時ふ物と宮ららとを後のんおあまにああし
 こあかりそあららぬらん十月とせは満して
 とはくすくぬんよあしせ給ひくわえ
 なるしとる紙は書あかりけき月名物女等に
 昔そののぬくしとるせれ常此女らん十月と
 せいぬあさんのあひびおとあしとらとせ給ひ
 おひひのわに尾白うさるけ給えさしして女
 ぎあんざんらんしとるしとあしとらとせ給ひ
 しとるふりのりらとあしとらとせ給ひ
 このせれ名物とあしとらとせ給ひ

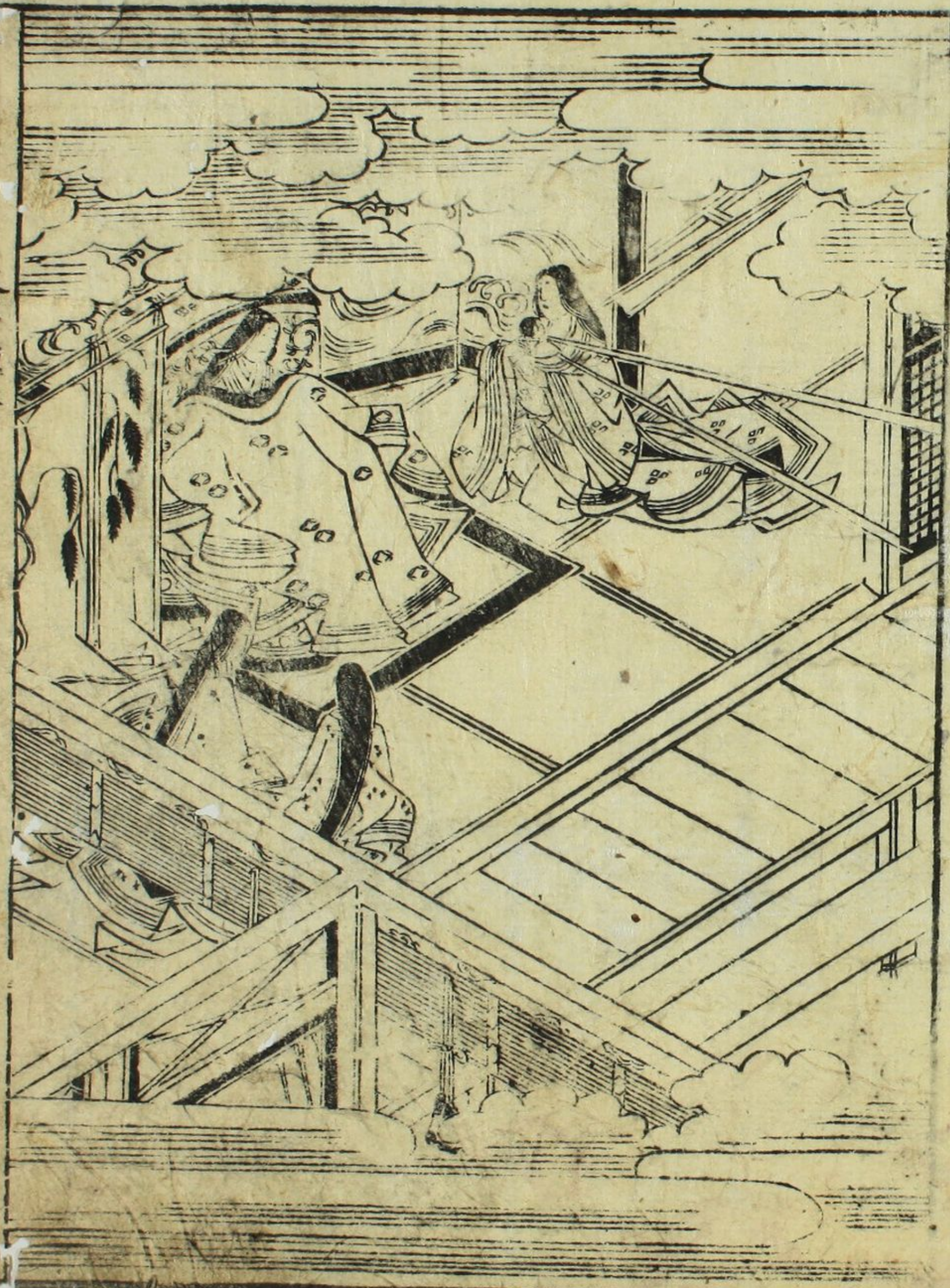
トヤうとあかり一歩うとあしとらとせ給ひ
 三月とるくわく家王辰の辰五月一日甲戌
 日午の時ほあんとあしとらとせ給ひ
 乃物女家女等とあしとらとせ給ひ
 幸あしとらとせ給ひ
 せいとらとせ給ひ



海と六端嚴美藤乃ちみめて雪のほちぐへりく
 一をしてはかきうらむとさきもくうんじてありぐさ
 くましくきれむ侍女宗女月郷雲家うらむ
 ひゆると西方うらむ赤葉のえもくちよとして
 らいたてまらりもる宗女つぎむつぎ死あてまら
 玉錦のほむとまきつはまんあふ入うそまられ
 宮中にえん明ありててしうや死あふれは
 うりてまらんちんをいのつまやうらんじた
 うつと知れまらん娘のうらみは知してはたん
 じやうあうでうあひたれど無端うあくかり
 もうししとわりあうとまうれど宗女のちみり
 たんトやまらりむの時のみと娘をたのむにそら

一しそすまづれどもあつらなまらう人のほらし
 ありしてはききあつらせぬふらと宮中へえぬて
 うらなやまていさやうあまひくらんじかん
 じきやうら死あがりかへしてた右のたはつ
 きくつるあつらきししとまふ物まのほ
 せいあれごもつるこはれまふごいあつら
 けりこらあつら聖人ありんきりり伝説ま
 まつるべしと物まあつらりゆ天下あえそ
 まつるまのまやうつらまはさん湯あ
 ぶらひまらうにまつら井とわらせぬその名と
 東井千歳志深井やまらと東井と千今
 の代まてありとまらと多武まはあつら

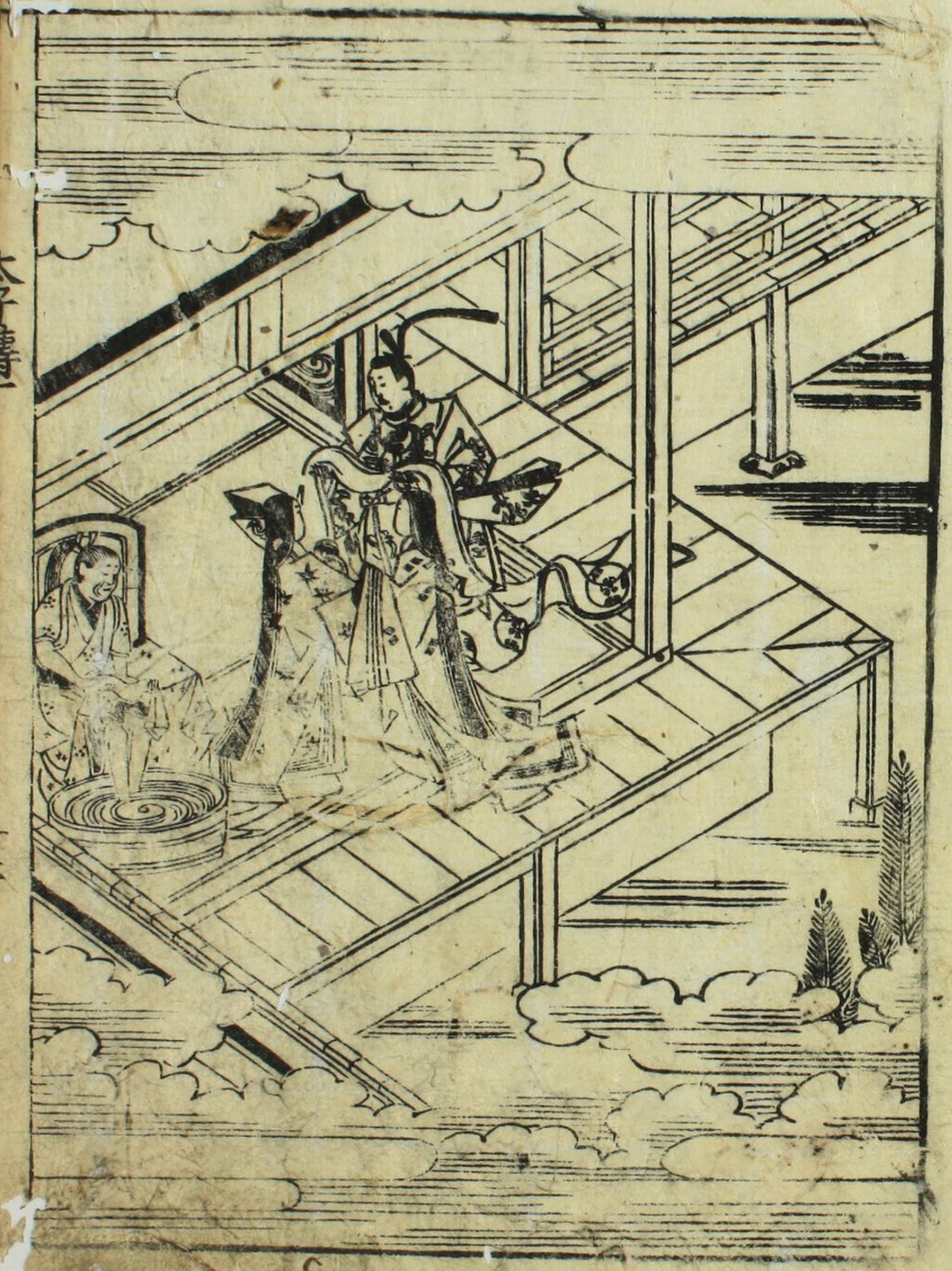
一し春井は男水とまられらとほら井
 とまら結とまら移めとのくた子に産湯
 けりけ海浴でまらたてまつら百官あ
 くまらつらとまら葉の弓遠の夫とまら
 甲子と射らとめして金輪聖王と長地と
 数娘室祓と長とまらまらつらり産
 湯の後のつらみまら敷をまらまらまら
 白娘とまられとまらあけまらまら
 一しにまらつらとまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまら



るしとて百人の養ふらうらとて三人を養ふ
よ一夫一妻のよしとて養ふれどもむられどくはより
そのち法月益非自益非とて養ふれどもむられどくはより
乃とに法とめ法とありゆとてふしとて法の親善は
内免のよく加給ひたれどいそとてたごかんぶとて
とゆりんきさうの三人のめれどいとてたごかんぶとて
み返しとて飲味とて養一のめれどいとてたごかんぶとて
尊中二の元を於て養一の豊清炊屋非の養
ハ揚豊日その法とて用明天中とてとてたごかんぶとて
用明天中とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
日乃法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて

その養教よのめありとて養一の法とて養一の法とて
まのち救世大菩薩たるとて養一の法とて養一の法とて
みの法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
つひありとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
しきとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
ゆて法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
みとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
やくはとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
さちとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
あちとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
しとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて
じとて養一の法とて養一の法とて養一の法とて養一の法とて

て履^こや^うとして^るは^らん^はつ^ま二^の燄^あら^しめ^る西^の
 方の^中所^の河^の津^にか^きか^す智^の恵^乃光^の明^をと^りて^神
 巫^の大^土と^夜照^しく^まり^つら^し祝^言を^れぎ^ひと^河津^の
 池^の智^海と^教英^二れ^をう^りと^しま^る一^切の^神
 と^とし^し路^の表^示か^らと^一の^義あ^らむ^日本^又じ^まれ^ん
 ま^しま^しら^ぬ念^の光^明あ^らま^りま^りと^車を^乃
 妙^用を^祈ん^片あ^らと^二の^光明^をあ^らま^りま^りと^車を^乃
 され^ど天^名大^所じ^まれ^あま^りし^り一^切の^神
 ぐ^らと^くる^あら^まり^て光^あら^まり^群衆^を得^ると^河
 ら^りし^路の^光明^から^と七^のの^知め^と母^大家^の
 と^まま^けけ^福と^賜と^て左^の大^良妹^子右^の大^良
 獲^我と^もい^めし^月郷^雲を^あら^まり^しと^大



大正十一年

十二

竅とありあられりもる審シロとしてとくつたれと
 しきとふる年しりひとくつたれりし
 十終りと海くしひとくつたれりし
 たりしとくつたれりし佛菩薩の利益を候す
 たりしとくつたれりし釈迦如来の西天よりあて三鬼
 の有破惠日と耀しきりし海のを法をフクの系域
 志やいと感し三寶とあかぬ法面とくつたれりし
 物をもとせりしはうけりしあを法を断除一切有誓
 願度脱一切法誓願修習一切法誓願奉持諸如
 来られ田弘の心をとくつたれりし毎日とくつたれり
 ありとあかぬ法とくつたれりし自中にも
 東のふちとくつたれりしとくつたれりし

ろひめて八月とくつたれりしとくつたれりし
 めて三宮の名状むらりしとくつたれりし
 ちみのいとしとくつたれりしとくつたれりし
 十月とくつたれりし十三ヶ月とくつたれりし
 の吉事とくつたれりし悉陀太子の十二ヶ月漢の孝昭天皇
 帝の十四ヶ月羅睺羅太子の十六ヶ月震怒天皇
 ろり八十年とくつたれりしとくつたれりし
 終りし年とくつたれりし八十とくつたれりし
 ひととくつたれりし又新とくつたれりし
 せとくつたれりしとくつたれりしとくつたれりし
 のあしとくつたれりしとくつたれりしとくつたれりし

大正十一年
 三

娘をなとて人いぬるもあつたれどもうつくしく後とて
 けりけり人いぬるのほめれとてうつくしくいれりたる
 又其田や新神のいぬるし路も中に立神寺
 のかたの人のいぬるし路も中に立神寺
 路の寺に路起りよふ方やとしふゆき
 ども新神ふ三人のいぬるし路も中に立神寺
 とていぬるし路も中に立神寺
 下やう路のいぬるし路も中に立神寺
 時ふよとていぬるし路も中に立神寺
 ひとめとのいぬるし路も中に立神寺
 めと何とていぬるし路も中に立神寺
 のせとていぬるし路も中に立神寺

目益娘玉安娘やうとていぬるし路も中に立神寺
 十七歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 十八歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 十九歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十一歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十二歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十三歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十四歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十五歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十六歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十七歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十八歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 二十九歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺
 三十歳新神大長乃いぬるし路も中に立神寺

竊か古法師 生み下 祿を羅るりしをこしつらと名を
 ちよ徳よ一葉のふひひドあまうこ何とこいひ
 ぞれにやをうとまうとせしこもやひゆんく
 と七都をうせしとりたてくつりしはうたてし
 今の西中や 命くうくこちちり 波ふ流るこて
 勢いあらしむと 惠日名花 巖等 南岳 峯 遠磨
 峯 取れあしと 法花と 致勝に 隆じし ありし
 またりしと 妙典と あらうりし 路のこま
 里 波ふ ゆんでん せし せき せん せん 白 髪
 みしと まうし ぬん せん せん せん せん せん
 一 きちろ子と ぬん せん せん せん せん せん
 りし せん せん せん せん せん せん せん せん

とゆへして ちよとらうとせきりやうしに 月 益 娘
 吾 籍 我 夫 長 多 門 天 乃 化 別 の じ と あ せ 白 蓮 娘
 八 妹 子 の 大 長 持 圓 天 の 化 別 じ じ じ じ じ じ じ じ
 ち 守 屋 大 長 廣 目 天 地 為 菩 薩 乃 名 娘 化 じ じ
 め 子 乃 唐 花 娘 八 葉 川 勝 増 長 天 化 別 化 別 じ じ
 せん せん せん せん せん せん せん せん せん せん
 の せん せん せん せん せん せん せん せん せん せん
 ち ち 肉 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
 かつしぬれどこの肉と せん せん せん せん せん せん
 と 葉 と 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今
 せん せん せん せん せん せん せん せん せん せん
 せん せん せん せん せん せん せん せん せん せん

太子傳一



太子二歳御時

敏達天皇二年

春二月十日自我御去佛世
見仏世法るまゝ益とほと
やん後とてに二歳よあ
とよまゝいひまゝい
めとむくくくくくく
とひのめのかれは
まのめりい
るは
あ
さ
の
非

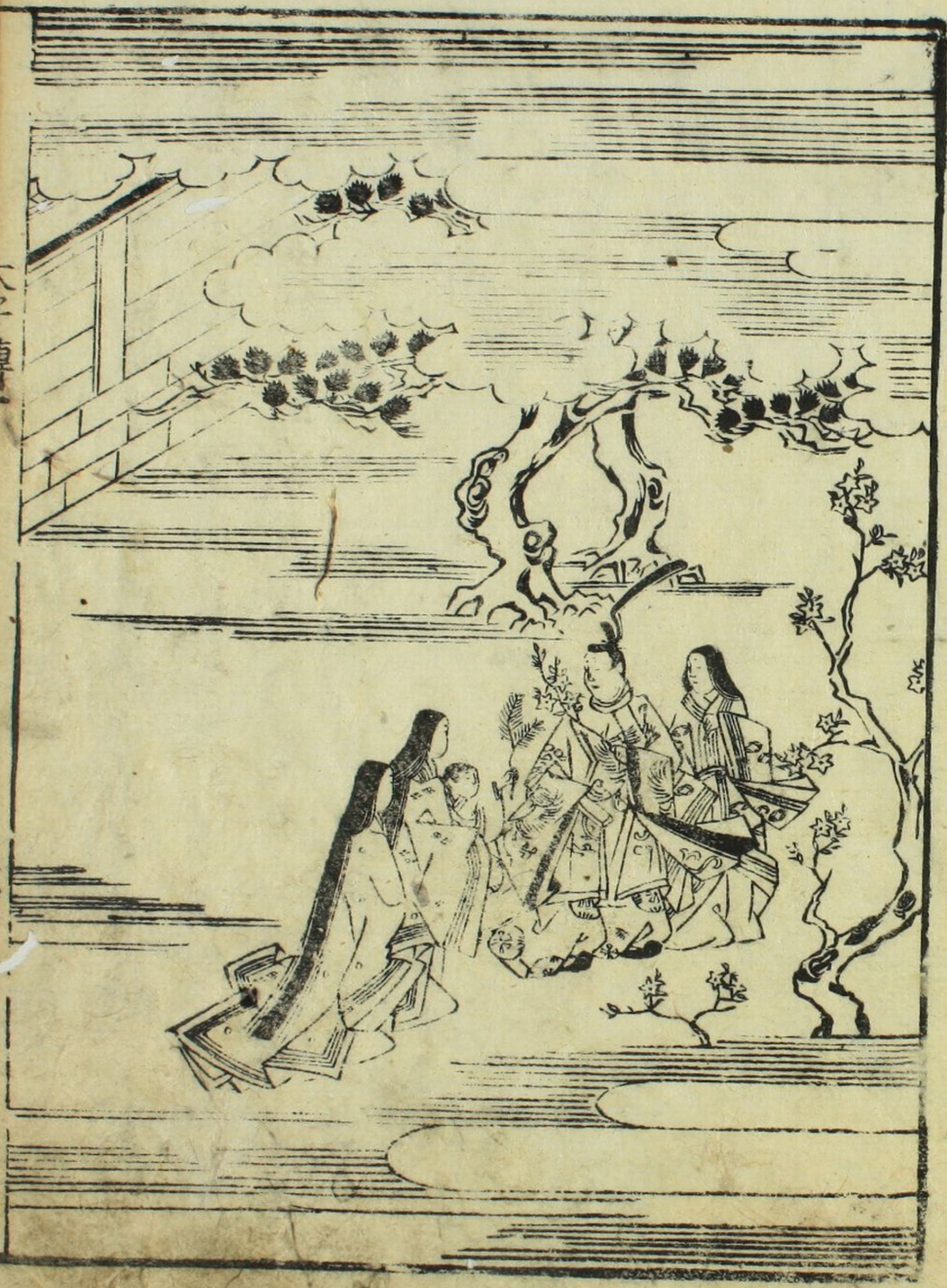
石をみてはまろくへーとてさしてはせすにほら
 かりんやるるんをんてはまろくののりてあ
 してはほりてあはれあひあはらふもあらうてしめ
 臨は舎利とむしはほりてあはれあひあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 はん甲ふあひに思はほりてあはれあはらふもあらう
 一むろふあひに思はほりてあはれあはらふもあらう
 かりんやるるんをんてはまろくののりてあ
 くあはらふへーはあらんをんてはまろくののりてあ
 いらんとほりてあはれあはらふもあらうてしめ
 時のおりはほりてあはれあはらふもあらうてしめ
 さくらんをんてはまろくののりてあはれあはらふもあらう

一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ
 一とあはれん佛の法なり利益とてあはれほりて
 のりてあはれあはらふもあらうてしめ

あり稱揚漢教したてしより制しきまをせしむる
 としりたりしとぬしに我朝の福田これ舍利なり
 しとせしむるも心はしるなりまやうまんの親なる
 かてしに人神と現しあまのひ二葉ぐひしやの
 小児の神とあしりて二つあまよしりて見
 中法れりやとていふとあり給ふ宮中此持女宗
 せしりて梵をせして云々といふもこころか
 され佛た名号とて人にまてくんとあまをせ
 とあひがたれしきく殊なりは舍利とて
 じぶの肉眼とていふとたらしめられしと釋
 たりし中優曇花たりしとて中終たりしとて
 たりしとて我朝の天神地神十二代に神代とて

教子万劫とるそ仏法の名号ときくは神武天皇
 たりし人王とていふは廿九代なりは法
 朝に佛法をもちりしとてあまのあに云々
 世果よをまはしたるもあしりてあて佛法と
 ひぬめ給ふなりは舍利とていふは佛法の
 なるいといふれとあしりて給ふ作二月十
 あり一冊を六冊にたてし一巻悪持者の名展あり
 二冊は中師法法乃は之人日功徳名満れ日
 三冊を釋するせ死れなり舍利とては雙林福
 らんつ日たりて天地人とし法天法地の自に
 けいありしとて大智神をまじりて佛舍利とて
 らんといふもあまのあにむりて南云仏とて

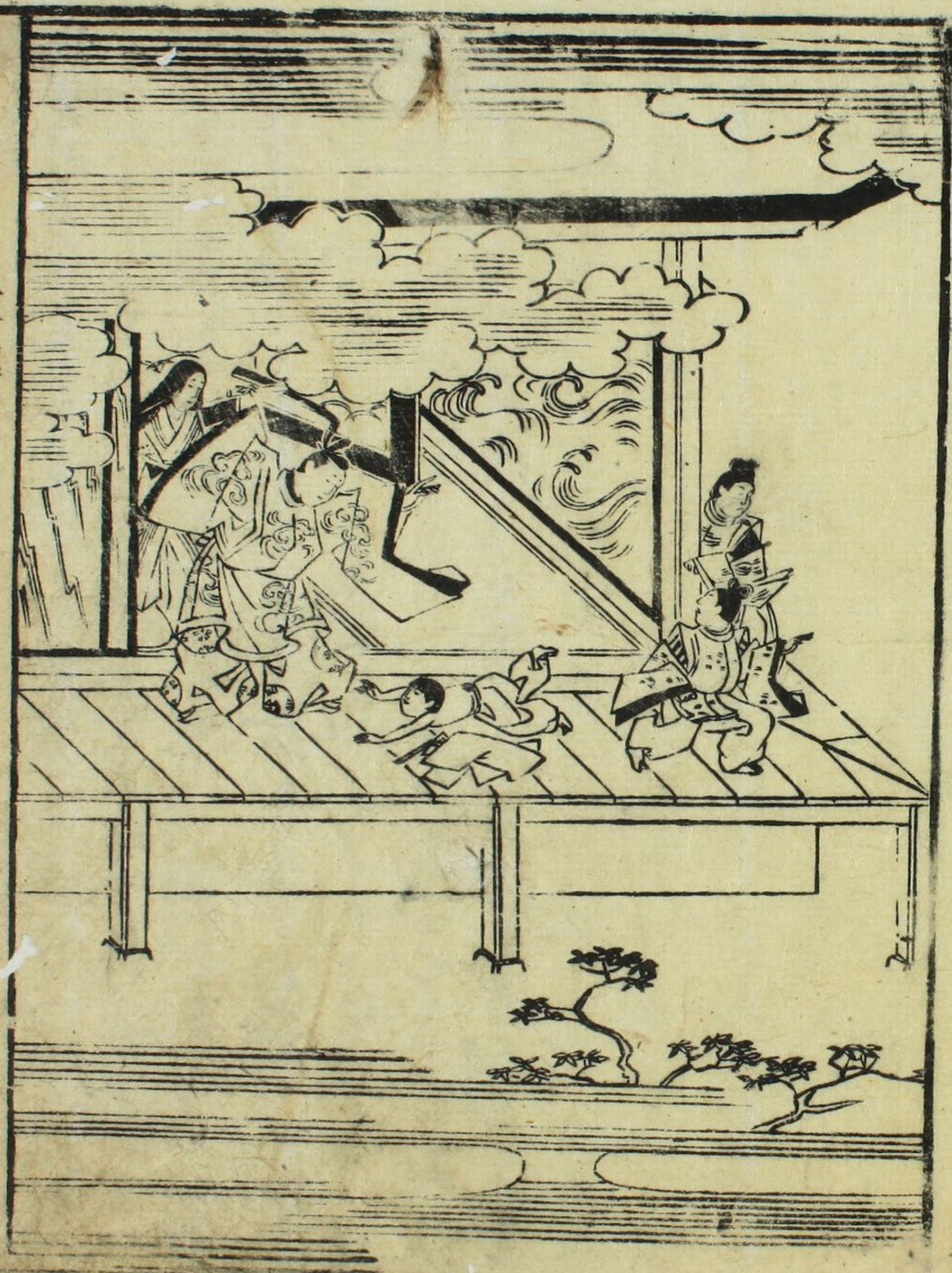
日みくじりーらとどにいさるるてはくいにぬ
 いらんたれちりう種ふふひく用明天王聖
 徳をよとゆうをの君やしてふれ乃歳中て
 玉作ぬ徳ふ後増長乃後とおぼしき者
 ゆに宮乃後菌よ清きして桃元とちうまに
 見せさうてまらひさるるの天宮 戸
 おれはぬに松と桃と二の枝と折てたまふまをそ
 ちうう終ひく物してのさぬりく柳この松を
 桃とちうそといひのまといひ乃物とてちう中
 ちとちう終くたまれはこまはいといひくしき花と
 ちうしうちうちうちうはこちうはあひくありんども
 ちうしと物し終ふその時ちうまされはふと



たつ子四歳御時

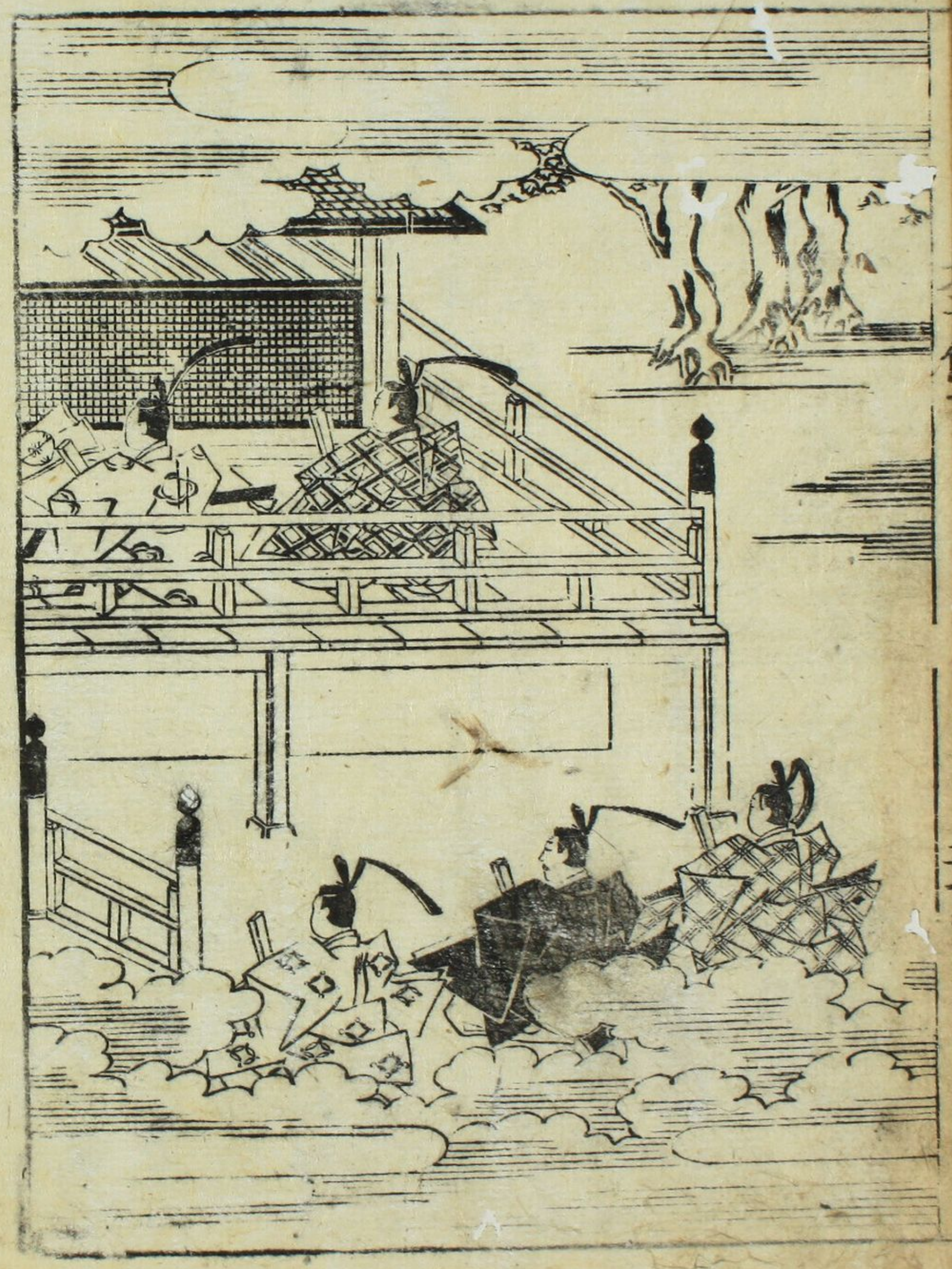
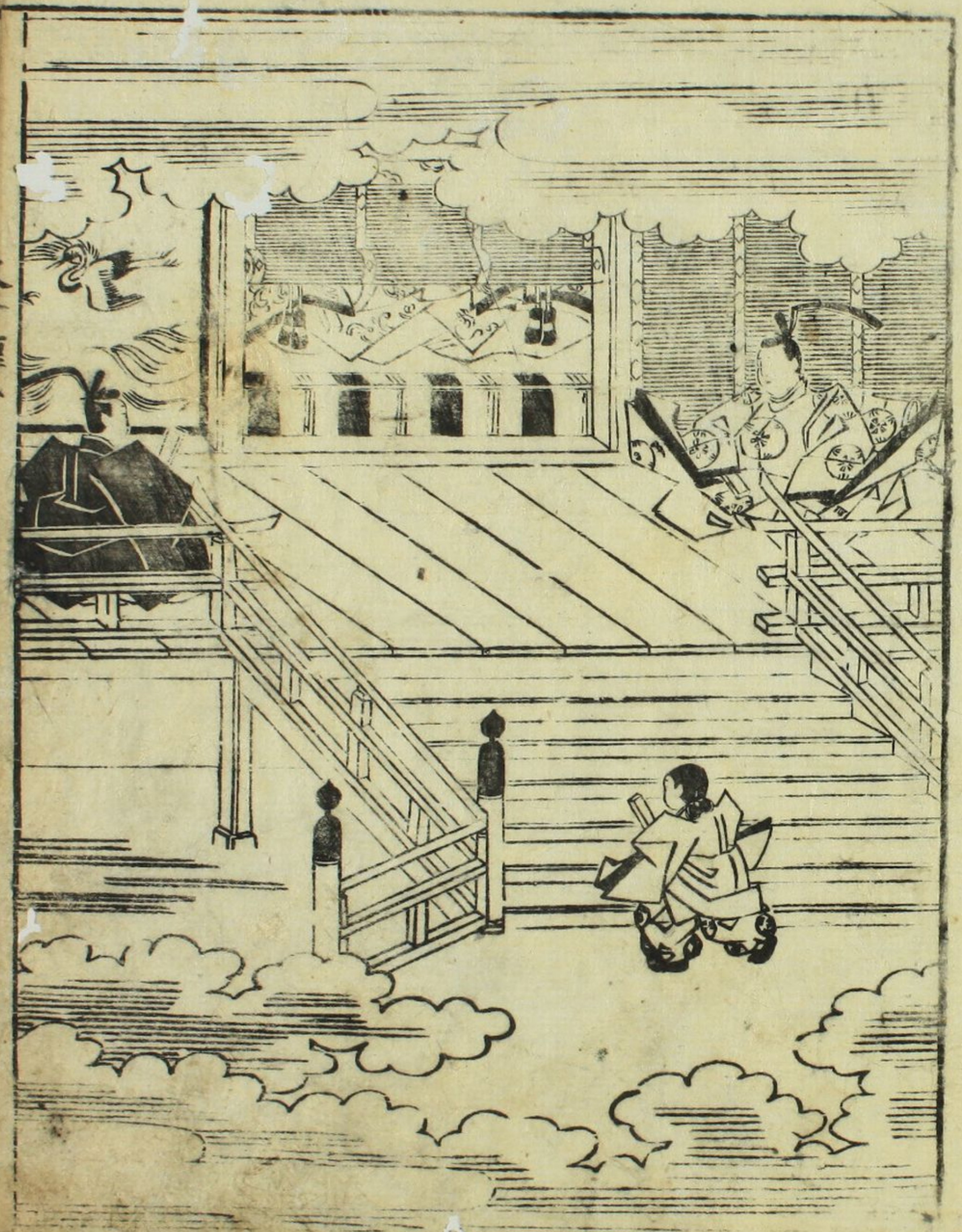
敏達天皇四年 新の歳

春三月乃あり父周明天皇豊日宮のうらみして
たつ子は龍宮にまゐりて遊ばしむるに
たつ子見ればおもしろく我れとて
て文中に喧嘩し侍りおれ父の天皇まゐりて
激しくんとて屋中にも未だ禰中と見え
ふりて指をたてし出たるをせあひつるに
氣の介よおしく見ればたつ子は兄弟の
まゐりて文は未だ遊ばしむるに
子連共ふも遊ばしむるに
衣とぬれとて雪乃内とてあつて
おとろとめをくじりひそめりて



その時らこれたまたまは御中みちうのやとてくわは
 しりしてこのん体とひしてつり居あやうま
 遊あそばし御みあしと宮中みやちゆう宣のたまはるまじ
 げび居あやうま御みあしとこれとまじ
 びとひ自みづか余あまのまじとまじみおあひま
 小こちまひむらとまじとまじとまじとまじ
 何なにぞうをわとまじとまじとまじとまじ
 まれてらとまじとまじとまじとまじとまじ
 のがれとてつりものつりと説とひたつとまじ
 飛とびまひとまじとまじとまじとまじとまじ
 とまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 うめしてとれわり居とまじとまじとまじとまじ

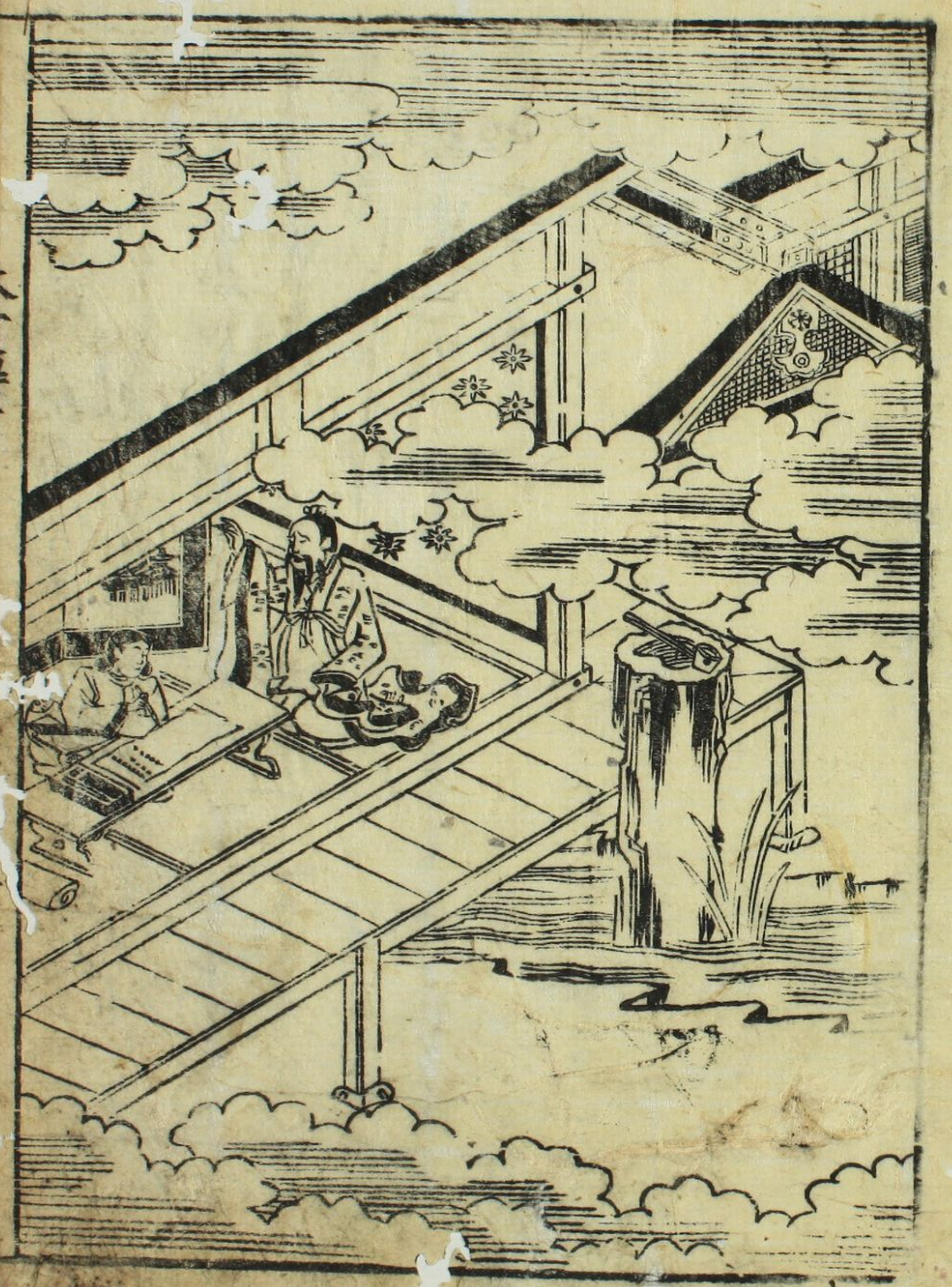
りのやふらぐあまはれものたつとまじとまじ
 んまよのつりやとまじとまじとまじとまじ
 大地ちちよあるとまじとまじとまじとまじとまじ
 さ廿ふた六む万まん也の旬じゆんをらと地ちのそとまじとまじ
 とまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 ちとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 くねとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 じとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 しとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 あとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 さとまじとまじとまじとまじとまじとまじ
 のんくくくくくくくくくくくくくくくくくく



くら井にそふらるるはくまきりやそはめのしたち
 うそくふやそれきつたよはれらるるに
 くのぬくこのくわいりあふれぬといふてこの
 うきうらるる人多くあつたがたつた
 ふきうくけいぬのまをよひよれらるるに
 空震とそとして六うわつらるるに
 てふろそそとれあんと小國を去れ
 してのそそあらんやまといふ國のうぬ
 いたれせすがらうのあひこれぬの
 多帝のあ限とらうしそそそつに
 かねれ中に崩潰するべしそのはく井と
 父のまははをなうことりくに二年れ中に

崩潰するべし
 かのさうぞろへーをれはくわの
 ねむらるるはくまきりやそはめのしたち
 うそくふやそれきつたよはれらるるに
 くのぬくこのくわいりあふれぬといふてこの
 うきうらるる人多くあつたがたつた
 ふきうくけいぬのまをよひよれらるるに
 空震とそとして六うわつらるるに
 てふろそそとれあんと小國を去れ
 してのそそあらんやまといふ國のうぬ
 いたれせすがらうのあひこれぬの
 多帝のあ限とらうしそそそつに
 かねれ中に崩潰するべしそのはく井と
 父のまははをなうことりくに二年れ中に

中しはめのとん 筆書とんいあまふあらしうが
 海ふらうと 卯興乃多子あうしめを 龍洞より
 竹が子あふ 竹家 竹博とらうとこれとんふらあま
 ぼてんのは 柳とてみ 徳博ととやとらうとをふ一
 字とんいなるししく 千字のさうととほほいあ
 昭敷の字 法うきあはしたまう 柳 龍洞とて
 乃本地中 卯の 龍をわして 龍洞の人 王世に
 の 龍を天 卯れまうまの 龍とて 龍 龍 龍 龍
 月乃 龍ふはうとたあうくも 一 杖のうりうと
 とをいしを 末 卯とらうと百 龍 龍 龍 龍
 とあうらうまのともあうに 龍 龍 龍 龍
 卯とふふいじとまやうれまうらうとら 龍 龍 龍



ころしあつに身みに佛ぶつ法ぽう入いりて思おもひとてのぞくは
 路みちよりとまらねどとれり甲か申まをす所の徳とく盛さかに
 このとれみぬ建たてて終はつつ子こ三百ひゃく余あまりれ徳とく盛さかに
 ことほけありてく徳とく持もちてしむ孝たう子この徳とく盛さかに
 真まに乃の處こゝ一ひと心こゝろをいりてはるるあり徳とく盛さかに
 世よ親おやをれ方かた便たすかりし徳とく盛さかに徳とく同おななりしとこの
 事こと一ひと心こゝろをいりし

孝子傳 一巻 終

十三年 十月

